

私の幼児教育論

——その出発点——

佐藤文子

ついて考えることを書くようにとの話があつた時も、何か書けるだらうと思えたのでお引受けしたのですが、資料はたくさんあります。言いたいことは一杯ありませんが、最近の体験について整理がつきかねて、思うように筆が進まずになりました。

私は国立大学教育学部の幼児教育研究室に所属し、主として幼稚園教員養成課程の学生指導にあたっております。私自身幼児に関心と興味をもって研究などもしておりますが、教育という点では、大学の学生指導に主として責任をもつ者です。従つて、私自身は一人の人間として自由に子どもに接し、自由に言いたいことを述べたいと思っても、私自身の経験にも自ら限界があり、私の幼児教育に関する発言も、上述の立場からの制約を受けたもの——意図的にそう限定するということではなく——になると思います。

この三月に私たちの大学では幼稚園課程の一期生を卒業させました。また付属幼稚園でははじめての三年保育課程修了児を送り出しました。

こういう時期ですので、私自身この三年ないし四年間の経験を整理、反省したいと思っていましたし、編集部から、幼児教育にはあったように思われます。特に卒業論文提出期限の迫った冬休

国立大学の幼稚園課程には多くの問題がありますが、特に一期生の場合、大学側も卒業生を迎える社会も、受入れ体制不充分のまま出発したため、学生側には不満や不安が多く、私たち、幼稚園課程の学生に直接、接することの多い教官側も同様に戸惑うことが多く、時には教官——学生の関係も忘れて、互いに不満や不安を分かち合つたり、時にはこちらの期待にそわない学生にいらしたり、……と何かと感情的に巻き込まれることも度々でした。若い母親の長子に対する関係に近いものが、一期生との間にはあったように思われます。特に卒業論文提出期限の迫った冬休

み頃よりは、一方で学生との接触が濃密になりながら、就職問題など困難な事態もさけられず、四年制大学における幼稚園課程の意味などを考へると、卒業に際しても単純に「おめでとう」と言いたい複雑な気持ちで、一期生を送り出しました。そして、この四年間の私自身の学生指導をどう評価したらよいのか、結論を求めるべく思案しているのが私の目下の状態です。

一方、三年前に付属幼稚園に三年保育課程がおられたのを機会に、三年保育児の成長の過程を追跡したいと思い、入園当初より観察を続けて、卒園間際まで、発達検査をしたり、製作物の写真をとらせてもらつたりして、今その整理をしているところで、こちらも三年保育の結果をどう評価したらよいのか、まだ結論に達していないところです。

これからは、幼稚園での観察を基に、幼児教育に関する問題を私なりに掘り起こし、考へてみたいと思うのですが、今はどこから手をつけてよいのか、私自身整理がついていない状態ですので、今回は、幼児教育について私が考えたり、発言する時、私がどういうところにいて、どういう立場からするのか、先には私の外的立場を説明しましたが、もう少し主観的、内面的に明らかにしてみたいと思います。というのは、このことが私自身にすでに明らかになっているということではなく、先に述べた幼児教育について

対する私の立場——幼児に対する直接の興味、関心と、幼稚園課程の学生を指導する立場からの幼児教育に対する興味や関心という二重性が、私自身の中でどういうふうに関連して、幼児教育に対する問題意識となって出てくるのかを、私自身の日頃の考え方や感情を整理しながら考えてみたいと思うのです。

そこで先ず、私が大学で学生と接觸しながら、感ずることから出発したいと思います。

(1)私たちのおられた状況は、新しい課程の創設期ですので、この三～四年間は、カリキュラム、教育実習、卒論指導……等、幼稚園課程の学生指導体制をどうするかという問題が山積しておりました。幼稚園課程は新しくとも、国立大学の教育学部の枠内で考へていかなければならぬということで、多くの制約に出会わざるを得ませんでした。そして私自身非常に大きな失望と挫折感を味わいました。また一期生が、大学の全般にわたる準備不充分の中、不満と不安を感じていたことはすでに述べました。カリキュラムや教育実習の内容は、幼稚園課程の学生指導上とても大切なことです。今はこの点について詳しくふれません。たゞ私は、大学のカリキュラムがどのように設定されているか、そして何よりもそこで教える教師の姿勢がどうであるかということの

学生に与える影響の大きさを、新しい課程の創設期において、新たに知らされて、恐ろしくを感じました。

幼児教育は全ての教育の基礎であると言われています。そして幼児期の教育にあたる保育者、子どもの発達に及ぼす影響が強調されます。勿論、私はこのことを否定しませんが、教育における教師と子ども、あるいは学生との人間関係の重要さは、幼稚園でも大学でも変わりないなどつくづく思われています。大学における教師の人間的影響力を問題にせざるを得ないと、いふことは、一面で人間の可塑性の大きさを物語るものでしょう。しかしこの点について、最近の大学教官がどれほど真剣に積極的に考えているかということになると、私は非常に疑問に感じます。

(2)そこでこれに関連して、最近の大学教育の問題点を少し考えてみたいと思います。

先ず第一には、大学においても、学問や知識が人間を離れて一歩きしているのではなく、誰が、何を、どのように、教えるかが重要な問題であるにもかかわらず、大学の授業が研究の対象になることは少なく、大学の教官、特に教育学部の教官の中には、大学を教育の現場として考へない——教育の現場は、小学校、中学校、高校までと考える——という奇妙な風潮があります。私

は、大学ももつとオープンに授業研究をすべきだと思うのです。ここではこれ以上、この問題に深入りしませんが、ただ私が授業研究という時、今、小学校や中学校で行なわれている授業研究をそのまま肯定して、それを大学にも適用すべきだと考へているのではないこと、また授業研究によって、教官の自由な研究や講義を統制したり、監視すべきだと考へているのではないことを、一言つけ加えておきます。

第二には、大学というところは——いふより教育は——学生の主体性、自主性を重んずべきものであり、教官が学生にとやかく干渉すべきものではないといふ考えが、特に若い教官の中に多くみられます。私自身、学生の主体性、自主性を重んずることに何の異論もありません。しかし主体性、自主性を重んずることは放任とは違いますし、主体性、自主性は自ら育つものではないと私は考えます。

主体性や自主性は個人の自我の確立に伴つて育つものです。自我的確立が主体的、自主的行動を可能にすると同時に、主体的、自主的行動がまた自我の発達を促進させます。最近の青年には、アイデンティティーの確立——つまり自己の主体性の獲得——がおくれており、自己決定のできない若者がふえてきていることが指摘されています。自己主張はするが、本当の意味の主体的行動

の出てくる基盤である自己が十分確立していない——これが今日の学生の姿のようです。

アイデンティティーという言葉は、エリクソンが用いて以来、日本でも、今日では一種の流行語のようになっています。勿論エリクソン以前からも、この問題は青年期の人格形成上重要なことだったのですが、都市化の進んだ現代社会においては、全般的に自己確立が困難な状況にあるということは言えましょう。

しかし、いずれにしても、自己の確立は一挙になされるものではありません。発達的みると、自己の確立は周囲の人々に対する抵抗や反抗の中で進められていく。第一反抗期と言われる二歳半から三歳頃は、自分の欲求が、周囲の抵抗に出会って自分の欲求を経験し、自分の欲求を阻止する環境に反抗する時期ですが、この時期は自我の芽生えの大切な時です。第二反抗期と言われる青年期前期には、思想や世界観、人生観、価値観など、精神的な面で周囲の大人の世界の抵抗を感じる時期です。そしてこの頃は自我の確立に重要な時期と言われています。このように周囲の抵抗に出会い、環境を意識し、そして環境に抵抗している自分、抵抗を生み出す自分の欲求や主張を意識する過程で自分が発達していきます。

他の人の言動や自分の欲求、衝動につき動かされて行為するの

ではなく、「私が私の行為の主体である」という意識が私の全ての行為に伴っている時、換言すれば、私の行為の全てがそのような意識を反映している時、私は主体性のある人と言えるでしょう。そのような主体性は、私が行動して、私とは異なる他の人の動きにぶつかり、私の行為が相手に与えた影響に気づき、また相手の行為が私に与えた影響を意識するところに、つまり、私とは別の他の人の関係において、自分の行為の意味を自ら評価し、行動を調整するところに育ちます。

ものわかりのよい親や教師によって育てられて、小さい時から欲求は全て満たされ、何ら抵抗する必要のないまま成長してきた若者に、自己確立ができるないのは、ある意味では当然でしょう。大学で主体性を重んずると言つても、学生の中に主体性が育っていないとすれば、学生が自己を確立し主体性を獲得していくのを援助するのが、今日の大学教育の役目の一つではないでしょうか。しかし大学でもまた、学生の言いなりになり、好きなことをさせるのが理解ある教師だと考える教官が多いとしたら、今の学生は一体どういう大人になるのでしょうか。大人が自己的価値観に基づく真実と自信をもって若い人々と対決し、自己主張する時、若い人々の中に抵抗が生まれ、世代間の葛藤が生じ、互いに自己決定が迫られます。理解ある教師と自任している教官が、学

生の自己確立をますます難しくしているように私には思われるのです。

(3) 最近の若い人々の自己確立のおくれと関連していると考えられるのですが、私は、最近大学でかなりの時間とエネルギーを学生の生活指導に費しております。挨拶とか返事のし方とか、細かい点にまでふれれば限りないのですが、私が最も痛切に感ずることは、集団生活をしていく上で、協同するとか、責任を果たすことが、今日の学生には非常に難しいのです。たとえば、研究室全体で何かしようという時、全員が楽しく参加できるような計画を立てるということが難しく、それぞれの学年とか、特定のグループの利害が前面に出てまとまらなくなる、ようやく係りの人

が四苦八苦してまとめる、今度は実行の段階で「私は参加しない」、「私行くの止めた」という風にぬけてしまうのです。理由は何であれ、こういう具合で係りになった人だけが苦労します。これは学生全般というより、幼稚園課程には女子学生が圧倒的に多いので、あるいは女子学生に顕著にみられる行動傾向なのかもしれません。幼稚園などで子どもの遊びを観察していても、男の子は多少自分の気に入らないことがあっても、自分を抑えて、共通の目標達成のために協力しようとする姿勢がみられるのに対し

て、女の子の場合には、嫌いな子と組んだりすると、「私やめた」という風にして、一人ぬけ、二人ぬけして、遊びがもり上がりないことがあります。私自身、女性として、これが女の人の特性だと決めつけたくないのですが、皆で共同する楽しみのため、自己犠牲——という言葉はあまり好きでないのですが——を厭わないという姿勢を、今の学生の中に見ることは稀です。共通の目的に向かって役割を分担し、責任を分かれ合うという集団生活の基本を学習していないのか、それとも無視するのか、今この学校教育では、小学校から、話し合いによる民主的な集団の運営を経験しているはずなのに、一体どこに問題があるのでしょう。

(4) 今述べたことは、目的意識の稀薄さとともに関係がありそうです。今日の学生は総じて、自分の人生に対する展望を欠いているようと思われます。現代のような時代には人生の展望を持つことは難しいと言えどそれまでですが、明白な目的意識を持って大学生活を送っている学生がどれだけいるでしょうか。大学に入る迄は、大学入試に合格することだけが目的で、何のために大学入るのかを考える余裕もなく、受験勉強をしてきた学生が多いのです。学歴社会とか受験体制の弊害が云々されます。

今日の社会体制が若い人々の人間的成長をゆがめていることは確かでしょ。しかしこの問題にも、ここではこれ以上立入りません。ともかく中核となる目的意識が稀薄ですので、大学における行動や活動の意味を判断、評価する基準は、楽しいか楽しくないか、ということになります。そしてその楽しさも、若い人々の間に「フィーリング」という言葉が好んで用いられていますが、極めて感覚的な考え方です。そしてこのような意味把握の仕方は、環境に対して自己中心的で、その場的な態度をとらせます。

他の人々と共有し合うようなベースペクトイヴを持つて思考を開することをせず、自分の感覚的な好みに合ったものだけを吸収し、そうでないものは省みないという態度で取捨選択します。最近の学生は文献の読み方が下手だとも言われますが、これは知識とか能力の問題というより、彼らの世界に対する姿勢に關係があるように思われるのですが、これについても、また改めて考え直したいと思います。

どうも現代学生批判のようになってしましました。最近の学生

の悪い面だけを並べ立てたようですが、私は、勿論、今の学生が全面的に「ダメだ」と言うつもりはありません。彼らにはまた多くの良い点もあります。しかし良いにつけ悪いにつけ、今の学生

の姿が非常に気になることは、私が古い世代に入ってしまったからなのかもしれません。時には「こういう時代になったのだから、口やかましく生活指導などするより……」と思つたりもしますが、一方でやはり「これでいいのだろうか」という疑問が心の隅に残ります。

卒業式の日に、ある在学生が「これで昭和二十年代生まれは大學から消えたね」と言いました。一期生は在学中によく「私たちは、まだ本物のテレビッ子ではない。小学校の途中からテレビが家庭に入ってきたので、生まれた時にすでにテレビがあつた三十代の人たちとは断絶がある」というようなことを言っていました。昭和二十九年生まれと三十年生まれの間にどれだけの違いがあるのかはよくわかりませんが、昭和三十年代という日本の経済高度成長時代に生まれ育った人々が、間もなく、幼稚園や小学校の先生になり、あるいは親になるとしています。一体彼らはどういう先生になり、どういう親になるのでしょうか。彼らに育てられ、教育された子どもたちはどういう世代を形成するのでしょうか。

以上幼児教育とは直接の関係がなさそうな最近の大学生の特徴を長く述べきましたのには、二つの理由があります。

第一には、最初に述べましたように、私自身にとって、大学は教育の現場であり、そこで、私自身、教育の問題にどう取り組んでいるのか、自分の姿勢と立場を反省することなしに、幼児教育論を述べてもあまり意味がないように思われるのです。私自身、教育の現場で学生と接する時、理解したり、共感できる面と、どうしても理解し難い、あるいは受け入れ難い彼らの行動や態度に出会うこともしばしばです。そういう面を、何となくわかった振りをして見過ごすよりも、私自身の価値観を前面に出して、はつきりと対決した方が、学生の、人間としての成長にプラスになるのではないかと考えます。そういう意味から、最近もやもやと感じていたものを、少し整理してみたわけです。

第二には、教育は人の一生にかかることです。今の大学生も幼児期を過ごしてきました。彼らの幼児期はどんなだったのでしょうか。これからはどんなふうに成長していくのでしょうか。また今幼児期にある子どもたちも、やがて小学生、中学生……成人へと成長、発達していきます。

最近は生涯教育ということが主張されています。しかし現実に教育にたずさわる場合、ある人は幼稚園児を、ある人は小学生を、ある人は大学生をというふうに、ある程度の幅はあるにしても、一定の年齢段階にある人々を対象として、しかも大ていはか

なり長期にわたって、その段階の教育にのみ従事します。そうすると、人の一生という長期の展望をもつてその年齢段階の子どもを見ることが、とかく難しくなります。たとえば、幼稚園の先生には、幼児期が非常に拡大されて見えてきます。そして一寸した個人の発達差を深刻に受けとめたりしますが、人の一生という長期の展望に立って、同じ事象を見直すと、幼児期という枠内では重大に思えたことが実はあまり重要でなかったり、逆に些細なことと軽く扱っていたこと、あるいは見過ごしていたことが、大きな意味を持つていたり……ということに気づくことがあります。

幼稚園の子どもも、大学生も、そして私たち大人も、今いる場所はそれぞれ異なっていますが、共に胎児期から乳幼児期、児童期、青年期、成人期、老年期、やがては死へと向かう人生の旅路を歩んでいます。その過程にはさまざまな出会いがあります。私たちが教育していると思っている子どもや学生から、私たちが教えられ、成長することも多いのです。各自が自分に真実に、今おかれている教育の現場で子どもや学生に会う、そこから全ての教育も教育論も出発するものと考えます。